

# 戦争の体験記録

波川美子

中野三丁目

早いもので、戦後はや四六年の歳月が流れ、日本の勝利を思い描きながら歯をくいしばって頑張った人達もつぎつぎと亡くなり、戦後生まれの人が多くなった現在、だんだんと記憶がうすれて行く時、区報で体験募集の記事を読み、当時脳裏にきざんだ記憶を思い出し書きました。

## 学童疎開

南方の戦局が不利となり、十九年七月に入り三年生以上の学童疎開が決まり、田舎の無い我が家では、五年生の妹を疎開させる事になり、一人二〇キロの荷物を作り、桃三小は信州辰野という所から飯田線に沿った九つのお寺に、地域の班ごとに疎開する事になり、「無量寺」というお寺に決まった。七月末に子供達に乗せた汽車が見えなくなるまで、線路に提灯を振って見送った。

母のいない我が家では、せめて妹だけでも生き残れば幸いと思ったが、大粒の涙をためて見送られた母親達の顔が忘れられない。寒い信州の冬にそなえて、炬達こたすぶとんを、十人くらい寝

られる大きさのを我が家で集まって作り、送った。妹からの手紙は食物の事ばかりで、必要な品々を集めるのに苦労した。零下十度くらいの中で、川で大根洗いは泣くほどつらいと書いてよこした。

二月には父が面会に行き、帰りに空襲に会い、大菩薩峠を夜通し歩いて帰って来たが、今考えると父もまだ若かったのだと思う。七月に面会の番が廻って来たので、父はどこから手に入れたのか、キャラメルとバターを私は背負って行ったが、その晩甲府が空襲を受け、中央線が不通となり、妹には家は焼けた事を話し、元気で暮らすようと行って別れた。これが最後の別れかも知れないと思い、後ろ髪ひかれる思いだった。長野に廻り善光寺にお参りし、上野廻りで翌日やっと帰った。二〇年春には一、二年生も疎開し、四月頃は田舎でも食糧がなくなり、先生も苦労なされた事と思うが、子供達もつらい思いをしたようだ。十一月には帰って来た。髪の毛のしらみ退治には閉口した。今幼い孫がいるが、二度とこのような苦しみを子供達にさ

せてはならない。

## 五月二五日の空襲から終戦へ

二〇年二月になり、艦載機により昼間でも空襲があり、目の前で敵機に体当たりした皇軍兵士が、落下傘で降下したが、パラシュートが開かないまま地上に落ちた。警防団の人々が、担架で平野先生の救護所まで運ばれたのを見て、いよいよ内地も戦場かの感を深くした。田舎のない我が家では、皆が出かけた後あちこち片づけて、一日の仕事がこんな事でよいものかと焦った。

三月九日の夜から十日朝にかけて下町一帯大空襲があり、空が真昼のようにあかあかと燃え、逃げ惑う人々の悲鳴が聞えるようだった。一夜明け、父が出動した後に、会社の家族の方が、顔中チンク油で真っ白になりドロドロの服で見え驚いた。当店の品物をかき集め、持たせてあげた。この空襲の後、線路から二五メートル以内は強制疎開の命令が出て、隣組でも後の家の方がひっかかり三月迄に引越した。老夫妻と身体障害者の娘とお手伝いの四人なので、組長さん達と荷物整理に毎夜遅くまで手伝ってあげた。

空き家となった家々を野方刑務所の囚人さんが毎日とりこわしに来て、我が家は集会場所となり、昼は庭で炊事して、帰りは裏の井戸で洗って帰る日々が続いた。廃材で庭に防空壕を二つ作って下さったので本当に助かった。とりあえず必要な物を

考えては少しずつ入れる日々、警報がなる度に非常袋と先祖のお位牌と写真を仏壇から出し、小さいトランクにつめ防空壕で解除を待った。燃料も乏しく、庭に瓦でかまどを作り紙屑や木の葉を燃やしたりしてご飯を炊いた。

五月二三日夜、又東京に空襲があり、この時は班長以下皆勢揃いして焼け跡に手伝いに行こうと張り切ったが、二五日の日は隣組の常会があり、十時頃家に戻る前にすでに空襲警報が鳴り、永福町方面からの進入の一機が雷鳴のような爆音と共に、屋根に瀬戸物をたたきつけるような音がして、茶の間にも三発の焼夷弾が斜めに飛び込んで来た。父はすぐ座蒲団で庭にほり出し、燃え移った障子や、襖を足で踏み倒し、我が家の火だけは何とか消し止めた。あんなにこわして明日から困るのにと考えながら井戸に廻り、一身に池に水を送り込んだ。前側の家が燃え出し、高円寺の方が庭から大勢逃げて来たので、思わずバケツ一杯でもかけてから逃げなさいとどなった。水を汲みながらここで焼け死んでも思い残す事はないと、死に直面した恐ろしさ等少しも考えず、澄みきった不思議な心境を今でもはっきりと思ひ出す。

風向きが変わって横の家が燃え出したので、弟達が寝ていた蒲団を防空壕に入れた。その上に土を覆って父が逃げようと言ったので、ひとまず線路ぎわに逃げた。父がラジオと柱時計を、燃えさかる家からやっと思ひ出した。火事場の火の恐ろしさ。

木綿の丈夫なりユックに米粒位の火の粉がついたと思つたら、パツと燃え出し驚いた。熱風に吹きまくれ飛ばされそうになりながら家の軒が燃え落ちるのを見て、憲兵隊の通称「鳩の門」から入り、一夜を明かした。隣組の皆はどこへ逃げられたのか判らなかつた。

夜が明けて朝霧もやの中から学校(桃丘小)、駅も焼け残り、桃園町だけで焼けたのは八班だけだつた。朝とても寒く、憲兵隊でおにぎりを出してくれたが口にするどころではなかつた。桃園会館で罹災証明を貰い、組長さんの弟さん宅が焼けなかつたので、隣組の方達が集まって来て怪我しなかつた事を喜び、又いずれは焼けるのだからやつと身軽になつたと痩せ我慢した。立川の陸軍少年飛行兵学校に入隊していた弟も休暇を貰い帰つて来て、家は焼けたが家族皆無事な顔を見て帰隊して行つた。

二日程お世話になつて、父の会社の寮が焼けなかつたので、僅かな荷物を持って日本橋に移つた。従姉の所も笹塚迄歩いて行つたが、大原町一帯見渡す限り焼け野原だつた。一歳未満の赤ん坊を背負い、寝たきりのお父さんを担架で運び出し、町会のテントの中にいた。中野も大原町も両方焼けてしまつた。六月末まで日本橋にいて、組長さんの弟さん宅の隣家が田舎に疎開するので留守番に来てほしいとの話があり、焼け跡に近いので又高円寺に戻つた。

八月六日広島に何か特殊な爆弾が落ちたから黒いものを着る

ように言われた。広島の原因で伯母の息子も行方不明になつた。八月十五日朝から大事な放送があるからと正午から皆ラジオの前に集つた。はつきりした事はよく聞きとれなかつたが、どうやら日本が負けて戦争が終つたらしいという事が判つた。昼間、デマのびらが落ちて来たし飛行機も飛んでいるのに……。

勝つた事を信じ、ただ耐乏生活にたえて来たのに、張りつめた心の糸が切れて、青い空を眺めて大粒の涙をポロポロと流した。夜久しぶりに燈火管制が解かれて、明るい電燈の下で暮せるようになった。いろいろの情報が入つて来て、人々は対応に戸惑つた。八月二〇日弟が復員し、九月になり、マッカーサー元帥が厚木に到着し、日本は進駐軍の統括下に入り、中野の憲兵隊も進駐軍が来るので若い女はどこかへ疎開するように言われ、組長の娘さんも行くから私にも一緒にと誘われたが、男ばかり残して行くわけにも行かず、その時は舌でもかみきればよいと度胸をきめ、毎日食事と焼け跡整理にあけくれた。前の家の藤本さんが前住者の三木清さんの書類等をお風呂で何日もかかつて燃やされ、私も留守番をしている家の父上が陸軍の将官だつたので、書類をもやし軍服をほどこいた。暮れになり、疎開先から家族が引揚げて来られるので、離れの方を借りて父が裏庭に掘つ立て小屋の炊事場を作つた。

十一月に妹も帰り、家はなくなつたが家族五人の顔が揃つた。後年娘が高校生になつた時、何故戦争をする事を国民が反対

しなかったかと言うので、戦後やつと言論の自由が許され、民主主義となり、皆が自由にしゃべれるようになった。このためには祖国のために若い命を捧げた人、又外地で、国内でも沢山の人の犠牲によって今日の繁栄がもたらされた事を深く考えねばならないと教えた。せめて当時に偲び、八月十五日は飢えをしのいだスイトンを作って心を引きしめている。

#### 追記

昭和六一年「第三回東京に生きる」に応募したものに少し手を加えてまとめました。

